



# 5月の園だより



## 今月の予定

令和 2 年 5 月 1 日

さかえ保育園

1日(金)	
2日(土)	
3日(祝)	憲法記念の日
4日(祝)	みどりの日
5日(祝)	子どもの日
6日(振休)	振替休日
7日(木)	
8日(金)	
9日(土)	
10日(日)	
11日(月)	
12日(火)	
13日(水)	
14日(木)	
15日(金)	
16日(土)	
17日(日)	
18日(月)	
19日(火)	
20日(水)	
21日(木)	
22日(金)	
23日(土)	
24日(日)	
25日(月)	
26日(火)	
27日(水)	
28日(木)	
29日(金)	
30日(土)	
31日(月)	

この数年、私たちは未曾有の体験を重ねています。関西や東日本の大震災、台風災害、豪雨水害、そして新型コロナウイルス感染症。その度に力を合わせて困難を乗り越えてきました（乗り越ろうとしている）。それらの災害に対してどう備えるか、対応や対処するかに取り組んできましたが、今回の新型コロナウイルス感染症に関連する様々な人や社会の動向を見ていると、場当たり的だったりその場しのぎ的だったりしたのかもしれない、もっと広義にもっと起こり得る事態を想定し、もう一步根本的に改革する必要があったのかもしれないと考えさせられます。

保育園に限って言えば、私たちは毎年度インフルエンザやノロウイルス、RSウイルス、アデノウイルスなど複数のウイルス性感染症に対応、対策し、その拡大を防いでいます。

しかし、政府や行政が1月末まで悠長に構え、感染リスクに正しく対応や防止策を発信しませんでした。我々はインフルエンザやノロウイルスに対しては能動的に情報を集めて予防していますが、今回は受け身になっていました。そういうリスクマネジメントに関する能動的な姿勢や態度、また具体的な対応策は明確にしておくべきでしょう。国や行政を待つのではなく、正しい情報を集めて判断する力を身に着けたいし、また、もちろん行政にも能動性を求めたいと思います。

そして、国や行政に見直しを求めなければなりません。

例えば昭和22年からほぼ見直されていない最低基準。3対1、6対1、20対1、30対1など、先進国としてあり得ないし、最低基準に近い人数での集団保育が前提となっている。それこそがリスクであるから見直すべきだ。保育園など乳幼児施設の職員が、8時間子どもの側にいて子守をするという非現実的な基準ではなく、ノコンタクトにより、衛生管理や知識習得、また保育準備や記録等の整備ができる基準にすべきである。その上加配職員が居て初めて、リスクヘッジや質の向上が保障される。最低基準が変わらなければ、今回のような危機的状態の中で、開所し続けさせることは、明らかに非現実である。

そして災害や疫病流行時の閉園判断基準と代替保育の備え。労働支援策だから開めない、それでは命が危険にさらされたままになる。命を守りつつ、社会的機能のための就労支援機能を行政エリアで考え、備えておく。エリアリスクマネジメントの考え方に沿って、対策を講じておくべきです。

加えて、企業に対する働き方改革の政策に、今回の在宅リモート勤務の推進と災害・疫病時の緊急的な就労形態を、雇用助成金や協力金と引き換えに立案させるべきである。

通勤の満員電車やバスで感染が広がることを今でも政府は具体的に言わない（クラブやバーは名指したが）が、20~40歳代で新たな感染者の60~70%を占めるというのは、その労働人口が最も動いているからだという統計が出ている。そういった人たちは「出勤せねばならない」と言い、その出勤命令は昭和時代に若手だった管理職たち。そこに働き方改革の意識や方法の変革、変容が起きていないことが明白になった。そこにテコ入れできるか否かが問われている。震災後、台風19号の時にも「出勤しろ」「近所に泊まれ」と子育て世帯に言ったという記事や情報は出たが、それがパワハラとならず、仕方ないという風潮に終わったことも、今回の働き方改革におけるリスクマネジメント立案では参考にすべきことだと思います。

そして、保育園職員（保育士や栄養士、保育園看護師など）の社会的貢献の価値や地位向上を、利用者と共に広く社会に訴えたい！どれだけの保育園でどれだけの保育者たちが、子どもの健康や命、不安な心に寄り添い、保護者に笑顔で対応してきたことか！！家に帰れば疲弊しきって食事でも満足に喉を通らない、我が子を差し置いて他人の子どもを優先している自分への呵責、職業柄外出を徹底して控えて感染者にならないよう努力している私生活。それでも次の日の朝には、優しい笑顔で子どもたちを迎え入れ、保護者に笑顔でいってらっしゃい！と言うのです。保育園の職員はまるでマザー・テレサのような精神性をもって子どもたちを守っている。だから保護者が働ける、社会的機能が停滞しないのです。それをもっともっともっと、クローズアップして欲しいし、称賛するべきだ。医療関係者の命がけの健診にスタンディングオベーションするのなら、その医療従事者の子どもたちを預かり守っている保育園職員にもスタンディングオベーションを。

次年度、新たに保育園で働きたい方々、ぜひ採用面接などで今回のコロナ感染症期の対応を質問してください。職員の皆さんはどのように子どもや保護者を支えてきたのか？や「法人や会社、園はどのように職員を守り、支えてきたのか？」。その答えを聞いて、献身的保育の熱い思い、また職員に対する誠実な対応など、保育の思いや安心感を感じられなかったら、そこには就職しない方がいいかもしれません。危機や困難に直面した時こそ、人や組織の本質や本心が透けて見えるものです。

最後に、地球はとても美しい星です。しかし、経済拜金主義的な活動が重視され、開発すべきでない土地や森、水を汚すことに躊躇もしなかった。災害には復興や防災策で、ウイルスなどの疫病や感染症は毒で制して（抗ウイルス薬は毒で毒を制するという代表的な薬効です）きました。それらは、すべて経済拜金優先で判断され、また新たなリスクが新たな利権を生むように構造化されています。2月から本格的に世界を席巻した新型コロナウイルス感染症のたった2ヶ月の間で、ベニスの水は透明度を取り戻し、武漢では星空と安全できれいな空気が戻り、東南アジアではPM2.5が降らなくなった。現代の人が自虐的な環境を生み出す経済拜金主義の終焉が見えた気がします。最新テクノロジーは、きっと地球の美しさや心地よさを取り戻し、人が自虐的にならない経済活動と環境のバランスを創造していけるはず。そのような感性を、次世代である子どもたちにしっかり身に付けて欲しいし、たくさん感じて欲しい。それが世界が気付くべき課題でしょう。

コロナ感染症が1日も早く終息できるよう、一人ひとりが小さな力を合わせて、大きな力に変えていきましょう。その体験が、スタボロかもしれない経済や個々の生活を回復させるチカラになり得るから。

